



Mar.2024

福島県民俗学会

URL:fukushimafolklore.com

E-mail:fukushima.folklore1971@gmail.com

## 令和5年度東北地方民俗学合同研究会「コロナ禍と民俗」

令和5年度（2023年、第39回）東北地方民俗学合同研究会は、秋田県秋田市の協働大町ビル6階「千秋の間」において開催され、東北六県からあわせて45名ほどの参加がありました。

今年度の研究テーマは、「コロナ禍と民俗」でした。事務局を担当した秋田県民俗学会は、ここ数年の間、日常生活にとどまらず社会のあり方自体も一変させてきた新型コロナウイルス感染症に対して、どのような対策が考えられるか（これまで考えられてきたか）、これをどのようにとらえていくのかについて、多方面から議論を深めることを目的としてこのテーマを設定しました。東北地方民俗学合同研究会自体も令和2年度（2020年、第37回）研究会がコロナ禍により翌年へと延期となり、その翌年の令和4年度もコロナ禍により事前収録した動画を期間限定でインターネット配信する「オンデマンド開催」となるなど大きな影響を受けてきました。そして昨年度（2023年）は新型コロナウイルス感染症第8波の下でしたが、第38回大会が山形県山形市において「伝統的農法の民俗」をテーマとして3年ぶりに対面方式で開催されました。今回は新型コロナウイルス感染症が厚生労働省の定める5類感染症に移行して以降初めての研究会として、特に公式な規制もなく、懇親会まで含めて開催されました。

研究会の次第は、秋田県民俗学会の鎌田幸夫会長の開催のあいさつに続いて、秋田県民俗学会理事・研究研修委員会委員長の小田島清朗氏が今回の主題趣旨説明を行いました。その中で、小田島氏は「歴史を振り返れば、悪疫に悩まされた例は至る所にあり、その民俗は多様に伝承されていま

す。いまだ渦中ではありますが、今回の新型コロナ禍を民俗学としてどのようにとらえていくのか、多方面からの論議を行っていきたいものと思います。」と述べ、その論点の具体例として、「各地の疫病退散の民俗」「民俗に及ぼした負の影響」「民俗の生命力」「コロナ禍の日常に見られた人々の伝統的な動向等」の4つが提示されました。

この主題主旨にもとづいて、発表した各県代表者とテーマは以下のとおりです（発表順）。

- ①守谷栄一氏（山形県民俗研究協議会）  
「疫病の民俗」に取り組む
- ②鎌水 実氏（福島県民俗学会）  
「コロナ禍における祭礼組織の対応—白河提灯祭りを中心に—」
- ③畑井洋樹氏（東北民俗の会）  
「コロナ禍でのミュージアム展示」
- ④佐藤一伯氏（岩手民俗の会）  
「コロナ禍の岩手の神社—まつりの持続可能性について—」
- ⑤小山隆秀氏（青森県民俗の会）  
「コロナ禍における町会ねぶたの変化について」
- ⑥小田島清朗氏（秋田県民俗学会）  
「スペイン風邪・コレラの実態と秋田の疫病退散事民俗」

内容を分類すると、守谷氏・小田島氏がコロナ禍前における疫病退散の民俗、鎌水氏・佐藤氏・小山氏がコロナ禍における祭礼及び組織の対応、畑井氏がコロナ禍での博物館としての対応となりますが、近世からの疫病退散の歴史からここ3

年間の具体的な対応、さらにコロナ禍をとおして明らかとなった将来に向けての問題点まで、発表者により切り口は多彩でした。

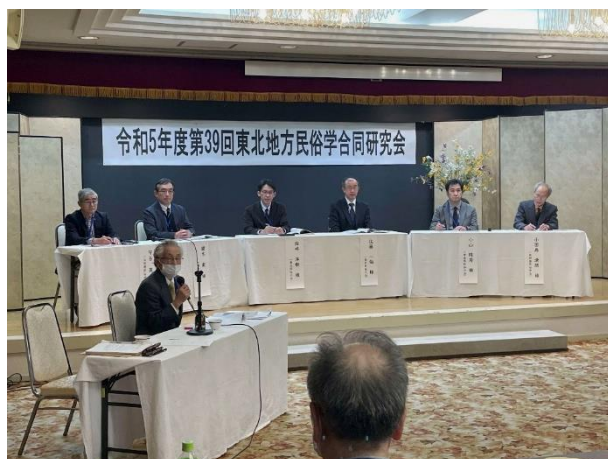
当会の鏈水実氏は、「白河提灯祭り」の祭礼組織である鹿島神社氏子会のコロナ禍での対応について、写真及び映像を交えて報告しました。具体的な内容としては、祭礼実施・中止それぞれの判断に至った経過、3年ぶりの再開にむけてこれまでの白河提灯祭りの歴史では見られなかった内容での実施にむけた協議、祭礼の継続に向けての取り組み及び将来への課題等を30分の持ち時間で発表しました。他県からの参加者からは、組織の運営方法や人員不足への対応等に関わる質問があり、鏈水氏はこれまでの事例をもとにコロナ禍に限らない各県の各団体共通の問題として、今後考えられる対策等の応答がありました。



【本会 鏈水実会員による発表】

各県代表からの発表終了後、休憩をはさんで6人全員が登壇し、秋田県民俗学会理事である加藤義規氏・阿部克人氏をコーディネーターとして、パネルディスカッションが行われました。最初に6人がそれぞれの発表にもとづいて補足説明、問題点の提起を行い、参加者からの質問を受け付ける形で質疑討論が進められました。コーディネーターからは特に民俗信仰、行事としての疫病退散を巡る話題が大きく取り上げられ、「コロナ禍から新たな民俗信仰は生まれなかった」といった意見も出されましたが、一方で参加者からはコロナ禍がこれまでの疫病と大きく異なる点として、科学的（医学的）見地に基づく公的な「規制」の強

さ、範囲の広さ等があげられ、以前のような地域独自の民俗は生まれる余地が少なかった点も指摘されました。活発な討論の後、最終的に司会である秋田県民俗学会の鎌田会長が、研究会として一つの結論をまとめることはせずに、今回の発表内容を受け止めた上で、それぞれの県で研究者がさらに考察を進めていくことでまとめとし、質疑討論は終了しました。



【発表者による質疑・討論(左から2番目が鏈水氏)】

研究会終了後、会場を隣ある「鳥海の間」に移し、交流会（懇親会）が開催されました。秋田県民俗学会鎌田会長の音頭による乾杯の後、各円卓の代表者から自己紹介（及び代表者からの指名による数名からのスピーチ）がありましたが、その中で秋田万歳継承会副会長である大友猛氏からは秋田県指定無形民俗文化財（文化庁記録作成の措置を講ずべき無形の民俗文化財）「秋田万歳」が披露され、その朗々と響き渡る美声と軽妙な語り口は参加者から拍手喝采を受けていました。最後に次年度事務局となる青森県民俗の会の小山氏から、あいさつとあわせて次回会場が青森県弘前市になることが発表され、秋田県民俗学会小野努副会長の締めあいさつにより盛会の内にお開きとなりました。（会員 鏈水 実）

### 地域持ち回り研究会を開催しました

\*日時 令和5年12月2日（土）

\*場所 いわき市三和町 OJONCO 館と上市萱集落の見学



今年の地域持ち回り研究会は浜通り地区になっているため、いわき市三和町で開催することにし、三和町上三坂の OJONCO 館に午後 1 時半に現地集合しました。おじょんこは、この地方独特の袖なし綿入れの防寒着のことで、背襦があるのが特徴的な普段着の衣類です。OJONCO 館は、日常的な針仕事が失われるなかで、おじょんこの製作の技術やそれに伴う地域文化を継承しようとしている「おじょんこ style@上三坂」の工房兼展示施設です。おじょんこの綿の入れ方の実演を見ながら、特徴や縫い方の詳しい説明を受けました。集会室ではお茶をいただきながらかつての上三坂の映像を見たり、会の活動についての話をうかがいました。



【おじょんこの綿入れ】

この会ではおじょんこの製作技術を継承すると同時に、現代性を持ち合わせた衣類であると価値づけながら活動している点も印象に残りました。かつてのように、家庭での技術の引継ぎは難しくても、サークルを母体にした民俗の活かし方も継承の一つの形であることを実感しました。

そのあと OJONCO 館から三坂街道沿いにある上市萱（かみいちがや）集落に移動しました。上市萱は中之作港から中通りに物資を運搬する「馬次場」として栄えた宿場でした。しかし磐越東線の開通（大正 6 年）や国道 49 号の付け替えにより、宿駅としての機能を失いましたが、宿場の形が保存されたまま今に至っています。旧三坂街道に沿って、きれいに短冊形の地割がなされて

いて、17、8 軒の民家が軒を連ねています。鎮守や地蔵堂などを含め、宿場の様子がよくわかります。地元の方の案内で、神社や仏堂、何軒かのお宅の屋敷内に入らせていただきました。主屋や蔵、付属屋などの説明を受けながら、夕闇迫る時間まで見学しました。屋根は茅からトタン葺きなどにかわってはいますが、宿場が栄えた当時の面影を色濃く残しており、建造物群保存地区としての保存を考えてもよいようにも思いました。



【上市萱の集落見学】

午後 6 時すぎから、いわき市の会員、四家久央氏の四家酒造のお宅をお借りして懇親会を開催し、会員同士の情報交換をしながら楽しいひと時を過ごしました。（会長 岩崎真幸）

## ふおーらむ・F 原稿募集中！

「ふおーらむ・F」は、誰でも気軽に投稿できます。地元の民俗芸能や祭礼の情報、ちょっと見かけた不思議な民俗事象などなど、ぜひ情報をお寄せください。写真 1 枚・200 字程度のものから受け付けます。広く会員に情報提供を求めるようなものでも OK です。小さな情報をたくさん集めて



いきたい  
と思います。  
(編集  
担当)

## いわきの雛祭りの歴史

先の3月3日は雛祭りでした。この日は桃の節句（節供）とも呼ばれ、雛人形を飾って女兒の健やかな成長を願います。

それに合わせて、いわき市暮らしの伝承郷では、3月31日（日）まで雛人形の展示をしております。本展では、大正時代から昭和時代初期の雛人形（段飾り、御殿飾りなど）を中心に展示しており、老若男女問わず多くの方々にご覧いただいております。

さて、いわきで雛祭りが盛んに行われるようになったのは、江戸時代頃からとされています。江戸時代末期から明治時代初期のいわきの民俗について書かれた『磐城誌料歳時民俗記』には、雛祭りが「女兒節」と表記されており、初節句時に蓬餅を搗いて菱形に切り、それを雛壇に供えるほか、親類に配ったと記載されています。

明治時代から大正時代にかけて、旧城下町の商家では、段飾りの雛人形だけでなく、雛壇の脇に押絵を吊るし、飾りました。これは、雛人形と同様に女兒の初節句時に贈られるもので、女兒の親族が中心となって手作りしたものです。内容は恵比寿や大黒、金太郎など、多岐にわたります。

一方、現在の遠野地区や常磐地区などの農村部では、俵や繭をかたどった煎餅や餅などを柳の枝に付け、雛壇の脇に飾りました。これは、昭和時代初期頃まで行われていました。

現在では、各家庭での雛人形飾りのほか、江名地区の中之作では、地域のサークル会員が製作した、ちりめん細工の吊るし飾りが毎年行われています。（会員 齋藤りぼん）



【今回展示された八段飾り(昭和10年)】

### Announce 企画展のご案内

#### ■いわき市暮らしの伝承郷

##### 企画展「人生儀礼Ⅰ」

本展では、一生のうちに経験する人生儀礼のうち、出産から結婚までの人生儀礼について紹介します。齋藤りぼん会員担当



◀遠野町で使用された長持

会期 令和6年5月25日(土)～8月25日(日)

開園時間 9時～17時(最終入園は16時30分)

休園日 毎週火曜日

◀展示解説会▶

日時 5月25日(土)、6月29日(土)、

7月27日(土) 13時30分～14時30分



▼今年度も、学会や祭礼調査などで大変お世話になりました▼学会や祭礼調査などで新たな知見を得られるのは、純粹に「楽しい！」の一言に尽きます▼今後は、そうした知見を少しずつ還元していけるように精進して参ります▼今後ともご指導よろしくお願ひ申し上げます(り)

福島県民俗学会通信誌『ふおーらむ・F』18号 2024(令和6)年3月31日発行

編集・発行:福島県民俗学会(会長 岩崎真幸)

通信誌編集担当:齋藤りぼん